

調査報告 九十九

# 文芸資料研究所蔵『伊勢物語の歌絵』解題

―併せて九州大学附属図書館蔵『源氏物語歌絵』に及ぶ―

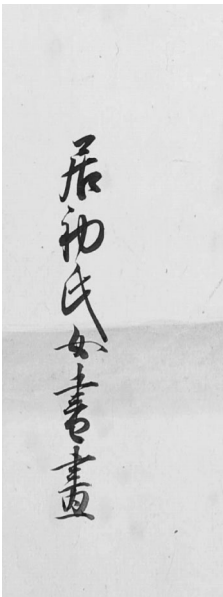
上野英子

## (一) はじめに

今回取り上げる『伊勢物語の歌絵』は、これまでも折に触れ、何度か発表されてきた資料である。

例えば、該書に記された「居初氏女書画」という奥書（図1）が、近世前期に活躍した女性絵師居初津奈のものと指摘されたのは石川透氏であった（「居初つなの奈良絵本・絵巻」〔『古典資料研究』第一七号二〇〇八年六月、のち『奈良絵本・絵巻の展開』所収）。

【図1】



この居初津奈なる人物については夙に小泉吉永氏が往来物研究の立場から、女子の啓蒙書である『女実語教・女童子教』の作者にして『女書翰初学抄』を初めとする数種の往来物の作者でもあり、しかもその殆どが自筆・自画であったことから「本文を著したうえに版下の清書から挿絵までも一人でこなす」多彩な人物だったとして紹介されている。<sup>(注1)</sup> また石川透氏も奈良絵本研究の立場から津奈の仕事を掘り起こされ、筆跡・絵柄・奥書等から津奈の書画と判定できる作品を博搜、大型絵巻物で二点・半紙縦型奈良絵本で二二点・中本型奈良絵本で二点の作品が津奈によるものであること、また版下書き一点も津奈によると指摘されている。<sup>(注2)</sup>

一方、該書の書誌・翻刻・伊勢物語絵画史からみた図様の特色等については、横井孝・上野英子「資料紹介 物語絵ひとつの形象―実践女子大学文芸資料研究所蔵『伊勢物語の哥絵』」(二〇一一年 武蔵野書店刊『考えるシリーズ2 物語絵・歌仙絵を考える―変容の軌跡』所収)に詳しい。それによれば、津奈の絵は「嵯峨本伊勢物語とその流れに立つ絵巻」の立場をとりながらも、おそらく他の伊勢物語絵巻図様の例を知っており、「自由領域」内でそれらを自家のものとして吸収していったもの」とまとめている。

そして【表記情報学】の視点から本文の特徴を分析したものととしては、拙稿「伊勢物語と【表記情報学】―『伊勢物語の哥絵』を軸として」(二〇〇四年度科学研究費(A) 報告書、今西裕一郎編『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究 IV』所収)がある。ここでは、該書が天福本系の本文を有していること(学習院大学蔵天福二年奥書本との異同数、二例)、該書の漢字使用率は12・7パーセントであること、これら本文異同と表記法の二面からみて、該書が最も近接している本文は一七世紀中旬に刊行された絵入版本、就中、山本九左衛門版『新板伊勢物語多入』や松会版『伊勢物語』であったことを報告している。

以上のような先行論文を受け、本稿では今回新たに判明したこと、すなわち九州大学附属図書館所蔵『源氏物語歌

絵』(以下〈九大本〉と略)もまた居初津奈によつて作成された資料であることを、両本の本文・書誌・図様等を対照しながら報告する。

## (二) ふたつの『歌絵』——主題

居初津奈の『女文章都錦』(延享四年、大坂 安井弥兵衛板。おそらくは津奈没後の刊行か)によれば、伊勢物語は「女のものすべきさうし」であるとして、頭注のなかで次のように説いている。

あながちに女に限り好色の道をしらしむべきにあらず。女は心やはらかにすなをなをもつて本とするがゆへに第一に歌道ををしゆる也。歌道をすける人はあらゝかによこしまなる事をかりにも思はぬ物也。故に此物語は余本に勝て歌道最一と定たる也。詠歌の大概にも古今伊勢物語後撰拾遺を学ふべきよしあり。しかればやすらかにすなをならんため、古今後撰拾遺をはまづさし置いて此物語を女にをしゆるもの也。されば二条家三代集の伝授にも先此伊勢物語を娘によむ事とあり。(注3)

津奈は安らかで素直な感性を育むためにも、女性にとって歌道の修養は大切で、伊勢物語は三代集に先んじて教えるものであると考えていたようである。

こうした立場を承けてか、『伊勢物語の歌絵』も和歌を重視している。すなわち、伊勢物語から六場面の和歌を選んで前後の地の文も織り交ぜて詞とし、これに、各詞に対応する絵六場面を添えているからである。選ばれたのは以下の和歌であった(なお段序とタイトルは小学館日本古典文学全集本による)。

### 第一場面(第三段「ひじき藻」)

思ひあらは葎のやとにねもしなんひしきものには袖をしつゝも

第二場面（第六段「芥川」）

白玉かなにそと人のとひし時露とこたへて消なまし物を

第三場面（第十二段「盗人」）

むさし野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

第四場面（第二十三段「筒井筒」）

つゝゐつのゐつゝにかけしまろかたけすきにけらしなにも見ざるまに

くらへこしふりわけかみもかた過ぬ君ならすしてたれかあくへき

第五場面（同右）

風ふけは奥つしら波たつた山よはにや君かひとりこゆらん

第六場面（第二十九段「花の賀」）

花よりあかぬなけきはいつもせしかともけふの今宵に似るときはなし

最後の「花の賀」は、穏やかな春の日差しを浴びて満開に咲き誇っている桜を、簀の子席の殿上人たちと室内の姫君や女房たちがそれぞれに愛でているといった華やかな場面である。祝祭的な場面で最後を飾ろうとしたあたりは、如何にも嫁入本的な色彩が濃厚である。また引用された和歌が物語の前半ばかりであることから、続編があった（あるいは予定していた）可能性も含んでおいたほうがよさそうである。ともあれ、該書は『歌絵』という書名が示すごとく、歌と絵とが対になって伊勢物語の和歌的世界を享受できるという趣向であり、女性読者を対象とした一点物の嫁入り本と思われる。

一方、同じく『歌絵』という書名をもつものに、九州大学附属図書館所蔵『源氏物語歌絵』（函架番号支子九一三ク一  
二、二 奈良絵本一巻がある。源氏物語といいながら、こちらは歌集形式に編集し直したようで、「春・夏・秋・冬・  
賀・祝」という六つの部立てを掲げ、源氏物語のなかからそれらに合致した巻（場面）を選び、部立順に配列してい  
る。加えて地の文をまるで歌集の詞書のように、和歌より段下げにして記している。例えば、冒頭「春」の部立の詞  
は以下のようである。

春 花のえん

弘徽殿の三のくちにておほろ月よの

内侍のかみに初てあひ給ひし時

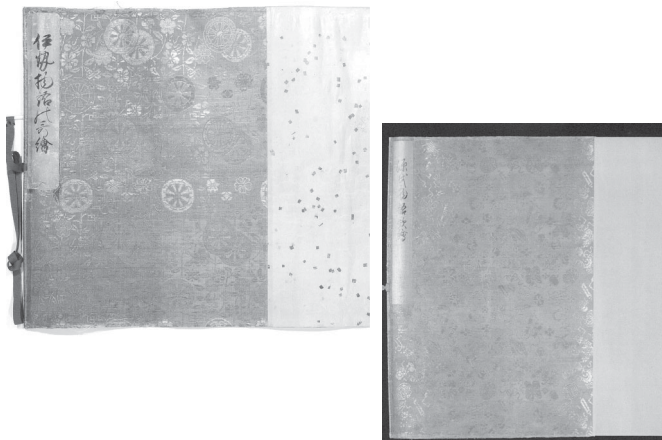
ふかき夜のあはれをしるもいる月の

おほろけならぬ契りとそおもふ

尤も、「賀」の部立に選ばれた若菜下巻だけは和歌が無い。おそらくそれは、朱雀院五十賀を祝つての女楽という、  
華やかで見栄えのする場面を選んだがために、詞もそれに応じた描写（誰がどのような楽器を用いたか等の説明）になつて  
しまったからだろう。このくんだり、物語本文に和歌は無いからである。

ともあれ、部立順に配列され、しかも地の文を詞書形式で表記している点からみて、該書もまた和歌享受の面から  
源氏物語を捉え直し、これに絵を添えた、まさに『歌絵』という書名通りの作品かと思われる。

【図2】



(三) ふたつの『歌絵』——書誌・文字・絵

次に両本の書誌を〈共通するもの〉〈共通しないもの〉に大別して見てゆくことにするが、便宜上、以下からは本学所蔵の『伊勢物語の歌絵』を『伊勢』、九州大学附属図書館所蔵の『源氏物語歌絵』を『源氏』と仮称する。

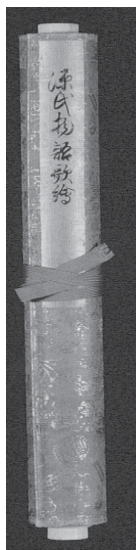
〈共通しないもの〉

紙高と全長。すなわち『伊勢』が紙高32・2 cm、全長515・5 cmであるのに対して、『源氏』はそれよりやや小振りで短かく、紙高31・5 cm、全長504・2 cmであること。

表紙の模様と題字（図2・3）参照。両本とも同じく緞子表紙だが、『伊勢』が萌葱色地に金・朱・白糸などで源氏車・桜・撫子・橘などを散らしたのに対して、『源氏』は薄鈍色地に金糸で、花鳥・俵・手鞠・小槌などを散らしている。また題字も「伊勢物語の哥繪」に対して「源氏物語歌繪」とある。

さらに裏打ちの有無。すなわち『伊勢』に施された金銀箔散らしの裏

【図3】



打ち紙が、『源氏』には見えない。

奥書の有無。すなわち『伊勢』では後見返しに「居初氏女書画」という奥書が記されているが、『源氏』に奥書はなく、最終段詞に書ききれなかった残り三行分の本文が記されてある。

両本の間には以上のような相違点があり、〈歌絵シリーズ〉として完全に揃っているとは言いがたい。とはいえ、注文主が異なったり制作時期が異なれば、注文主の好み・予算・在庫等といった諸条件も違ってくることだろうから、この程度の相違点はやむを得ないように思われる。また両本ともそれぞれに続編を計画していたとするならば、意図的に表紙や軸高を変えたということもありうるように思う。

〈共通するもの〉

卷子本であること。象牙軸であること。文様こそ異なるが共に緞子表紙を用い、題簽を表紙左肩に押し、しかもその題簽には布目地の空押し模様を施した金箔をまいていること。

この金箔を前見返しにも貼っていること。しかし後遊紙には金箔を貼らず、詞書に用いた料紙をあてていること。これら前後の遊紙に本文料紙を加えた、全十四紙からなる巻物であること。十四紙はすべて右側の料紙を上にして糊付けされてあること。

【表 4】

後見返	第29段			第23段			第12段		第6段		第3段		前見返
	花の賀			河内越え		筒井筒	盗人		芥川		ひじき藻		
第14紙	第13紙	第12紙	第11紙	第10紙	第9紙	第8紙	第7紙	第6紙	第5紙	第4紙	第3紙	第2紙	第1紙
奥書	絵	詞	絵	詞	絵	詞	絵	詞	絵	詞	絵	詞	金箔
38.0	50.1	24.9	50.8	25.0	50.6	24.7	50.7	24.7	50.6	24.6	50.6	24.4	25.8

後見返	祝			賀		冬		秋		夏		春		前見返
第33巻 藤裏葉				第35巻 若菜下		第20巻 朝顔		第21巻 少女		第26巻 常夏		第8巻 花宴		
第14紙	第13紙	第12紙	第11紙	第10紙	第9紙	第8紙	第7紙	第6紙	第5紙	第4紙	第3紙	第2紙	第1紙	
詞	絵	詞	絵	詞	絵	詞	絵	詞	絵	詞	絵	詞	金箔	
28.2	50.6	24.8	50.5	24.5	50.9	24.6	50.9	24.6	50.7	24.8	50.8	23.1	25.2	

作品の中から六場面を選び、各場面とも詞と絵とを対にして並べていること。本文料紙はすべて鳥の子であること。

また本文料紙は詞用と絵用とに大別されるが、詞の料紙は絵の料紙よりも紙幅が短いこと。例えば『伊勢』の場合、詞の紙幅が(24・4～24・9cm)であるのに対して、絵の紙幅は(50・1～50・8cm)と倍近い幅になっている。これは『源氏』も同様で、詞の紙幅が(23・1～24・8cm)であるに対して、絵は(50・5～50・9cm)、詳細は上記【表 4】を参照されたいが、両本は詞と絵の紙幅の割合が極めて似ている。

また詞の料紙には金泥霞引きが施され、絵の料紙には天地に必ず、金の切箔を散りばめたすやり霞を置いている。なおこの天地に置いたすやり霞は、両本とも一紙毎に天地の高さが異なっており、薄墨で施された墨書き線も確認できる。予め一括して描きこまれたものではなく、一画毎に描きこんでいったものと思われる。

以上のように、共通する書誌事項は多い。就中題簽と前見返しに貼った金箔の一致や、本文料紙の紙質・紙幅・装飾の一致、本文料紙の糊付け法などは、両本が同一本屋で製本された可能性を示唆するように思われる。

次に具体的に、両本の書影を紹介しよう。【図 5】に並べた二枚の写真はそれ

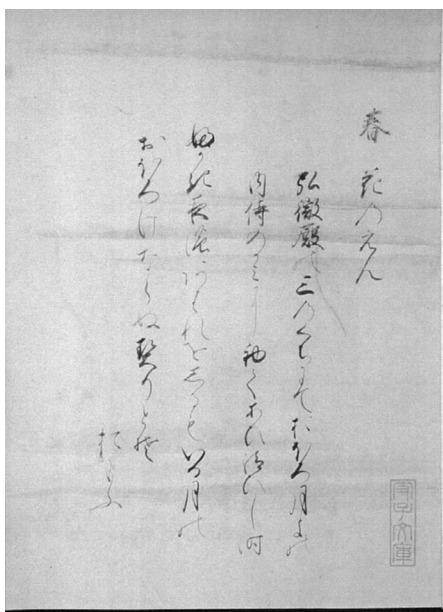


それぞれの冒頭の詞で、上が『伊勢』、「支子文庫」印の押された下が『源氏』である。

金泥の引き方、また文字の流麗な流れ、丸みを帯びた上品な文字など、よく似通っている。

なお【図5】の写真では『源氏』の料紙が黒ずんでみえるが、実際はそれほどではない。これは『源氏』に裏打ちが無く、また撮影時の下敷きに黒色の布を用いたこと等が原因かと思われる。また本稿で紹介する『源氏』の写真は紙焼きをスキャンして取り込んでいるため、データから転写した『伊勢』に比べて粒子が粗く、色調もかなり暗くなっているが、原本はもっと明るい色調であることをお断りしておく。

【図5】



絵も又、描き方の共通するものがある。次頁に掲げた【図6】は両本の絵の一部を任意に拡大したもののだが、例えば畳。両本とも畳の地は緑色で塗りつぶし、畳の縁には白線の上に等間隔で黒丸を置いている。

次に御簾。両本ともに薄茶色で綴じ紐を描き、四囲の縁飾りにはすべて緑色地に黒色の蛇行線を入れている。

さらに廂。両本とも板の継ぎ目に薄い茶色の線を入れ、それに若干の陰影をもたせている。また薄茶や緑で彩色した上に、苔であろうか黒い点をまぶしている庭石。草花の、特に葉の描き方などに共通項が見られるようである。

また【図7】は、上段が『伊勢』（河内越えの部分、下段の二枚が『源氏』（若菜下、女樂）の部分である。いずれも琴を弾く女性を描いたものだが、楽器の木目、爪先、瓜実顔の女君たちの面差し、髪を描き方などよく似ている。

今度は絵の全体像をみてみよう。【図8】の上段が『伊勢』（花の賀 図、下段が『源氏』（常夏 図である。

両本ともに天地に描いたすり霞に金の切箔を散らすなどの手法が共通している。

構図も然り。左上端から右下にかけて画面を大きく斜めに横切る線が入り、この線が画面を区切っている。加えて、いずれも斜線を挟んで右側の絵柄が従来の伊勢物語絵にも見られるもの、左側の絵柄が『歌絵』独自の追加部分となっているようである。なぜなら、後代に大きな影響を及ぼしたとされている嵯峨本伊勢物語の挿絵も、絵入本源氏物語の挿絵も、いずれも殿上人らが集っている右側の場面のみを描いているからである。その左側で、新たに、部屋の中に居る女性たちの様子を配したのは、ふたつの『歌絵』に共通する創作といえるだろう。このようにみえてくれば、両本は本文・絵ともに同一人物の手になるもので、居初津奈の書画と判定できるように思う。またこの両本は制作時期や制作経緯（注文主等）こそ不明だが、同一本屋で作成された可能性が高く、居初津奈の〈歌絵シリーズ〉として商品化されたものと思われる。

## 畳の縁・御簾・廂

【  
図  
6  
】

源氏：藤裏葉



伊勢：ひじき藻



## 庭石・草花

源氏：少女巻



伊勢：河内越え

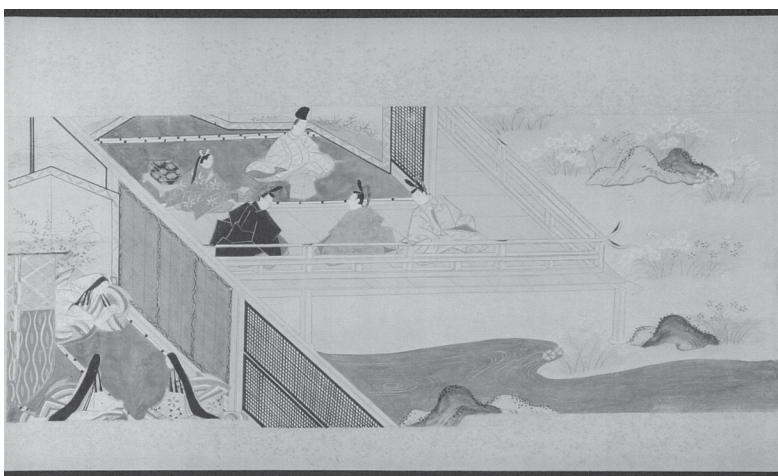




【図7】上段『伊勢』、下段『源氏』



【图8】上段『伊勢』、下段『源氏』





## (四) ふたつの『歌絵』——本文

最後に、ふたつの『歌絵』の本文についてみていこう。

『伊勢』の本文に関する詳細は冒頭で紹介した拙論中で既に報告しているので、ここでは結論のみまとめておく。まず該書の本文は当時最も流布していた天福本系である。しかも天福本との本文異同は僅か二例のみ。いずれも実践本の独自異文であることから、底本の本文を忠実に引用もしくは部分抄出していることが窺える。また六場面すべての詞を合わせても六三七語にしかない短い本文ではあるが、そのうち漢字が八一文字あるため、漢字使用率は12・7%となる。これは天福本（学習院大学蔵天福奥書本）の当該本文（六三八語）における漢字使用率7・8%と比較して、かなり高い数値といえるだろう。

そしてかかる『伊勢物語の歌絵』の本文は、前述したごとく、異同数と表記法の双方からみて、同時代の絵入版本、就中寛文九年（一六六九）江戸の書肆山本九左右衛門が開版した『新版伊勢物語入』とよく似ていたのであった。京都在住の居初奈津と江戸の書肆九左右衛門の本文とが繋がったのは一見奇妙な結果だが、九左右衛門は京都の書肆正本屋（山本九兵衛）の分家であつた<sup>注4</sup>とか、江戸初期、九左右衛門をはじめとする松会市郎兵衛・本間屋・鱗形屋の四書肆は京都の書肆と提携関係にあり、テキストが提供されていた可能性の大きいことがわかってきた<sup>注5</sup>という報告も出されているため、両者が底本を共有していた蓋然性は残されているようである。

一方、『源氏物語歌絵』の場合、その本文は物語からではなく、梗概書等からの引用と思われる。なぜなら「賀」

【表9】

部立て	巻名	料紙	冒頭句	古本系				改訂本系	増補本系			簡略本系		梗概中心本系		和歌中心本系
				①	②	③	④		⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
春	花菱	詞	弘徽殿の三の口にて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
		歌	ふかき夜のあはれをしるも	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	○	○
夏	常夏	詞	いと暑き比玉かつらの	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	×
		歌	なでしこのとこなつかしき	○	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○
秋	少女	詞	秋このむ中宮の御かたより	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		歌	心から春まつ園は...	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
冬	朝顔	詞	月さやかなりし雪のよに	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		歌	かきつめてむかし恋しき	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
賀	若菜下	詞	朱雀院の五十の御賀を	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
		歌	(ナシ)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
祝	藤裏葉	詞	雲井の鷹の姫君を夕霧の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		歌	いくかへり露けき春を	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×
		詞	さて御むこにとりて	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	×

の部立、朱雀院五十賀を祝う女楽のくだりに、

「…御かた／＼あつめ奉りて御かくをはしめ給ふ是を女かくと申也」

とあり、私に施した傍線部「是を…と申也」といった説明句は、物語本文中では決して出てこない表現だからである。

ではどのような梗概書だったのか。試みに、岩坪健氏の『源氏小鏡』諸本集成（平成一七年 和泉書院）をもとに比較してみた。【表9】

に掲げたのは、『源氏物語歌絵』の詞と歌とが、『源氏小鏡』諸本中の記述と比べてどの程度一致しているかを示したものである。縦の列には岩坪前掲書所収の小鏡諸本（二二本）を①～⑫の番号で示し、横の列には『源氏物語歌絵』各部立の詞と歌をおき、両者が一致した場合は○印（類似した表現でも○とした）、『歌絵』の本文（場面なり和歌なり地の文なり）が『小鏡』に全く欠落している場合には×印をうつておいた。数ある梗概書のなかの僅か十二点との比較にすぎないが、『歌絵』本文の傾向について、ある程度の見当をつけることは可能だろう。

なお①～⑫で示した諸本名は、以下のようになる。

①第1類 京都大学本（伝持明院基春筆）

②第2類 書陵部蔵本

③ 第4類 国会図書館本（古活字版）

④ 第2系統 神戸親和女子大学本（無刊記整版）

⑤ 第3系統第2類 都立中央図書館蔵本（三井寺聖護院系統）

⑥ 第3系統第2類 国文学研究資料館本（道安系統）

⑦ 第3類 天理図書館本

⑧ 第4系 神宮文庫本

⑨ 第4系統 大阪市立大学本

⑩ 第5系統 天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

⑪ 第5系統 京都大学本（飛鳥井重雅筆）

⑫ 第6系統 京都大学本

一見して明らかのように、【表9】には×印が特に目立つ項目がある。ということは、『源氏物語歌絵』には、梗概書ではあまり取り上げられなかった和歌や場面も含まれているらしい、少なくともそういう可能性が考えられるということになるだろう。

例えば〈春〉の部立の花宴巻、詞部分は源氏と朧月夜とが弘徽殿の細殿で初めて出会った、梗概書でもお馴染みのくだりである。しかし『歌絵』が選んだ歌は、翌朝二人が交わしたところの有名な贈答歌（「草の原」「いつれぞと」）ではなく、邂逅した夜に源氏が初めて詠みかけた「ふかき夜のあはれをしるもいる月の…」の歌である。しかもこの段の『歌絵』詞は、和歌が詠まれた時と場所を簡潔にまとめたもので、梗概書というよりは源氏物語和歌等の詞書から引用した感じが強いように思う。



また〈祝〉の藤裏葉卷、『歌絵』の詞部分は藤宴に夕霧を招いて雲井鳳との結婚をみとめたくだりで、これまた梗概書に頻出しているものである。だがそこで梗概書が紹介しているのは、内大臣が誦した古歌で卷名和歌にもなっている「あさひさす藤の裏葉の…」であり、『歌絵』のように夕霧の返歌「いくかへり露けき春を深き夜の…」を取り上げた例は少ない。

更に〈冬〉の朝顔卷にいたっては、一二点の梗概書に皆無の場面であった。この段、梗概書では、朝顔前齋院と源氏との経緯や贈答歌を取り上げるのが一般的だからである。ところが『歌絵』は、朝顔前齋院の登場に心を痛めた紫の上を慰めるべく、女童たちに雪まろばしをさせ、源氏が紫の上と共に眺めている場面を取り上げている。尤もこの〈月夜の雪まろばし〉の場面、梗概書では人氣薄だが、図柄としては極めて有名である。『絵入源氏物語』の挿絵を初めとして、手近なものでも京都国立博物館蔵土佐光吉画『源氏物語画帖』・石山寺蔵『源氏物語画帖』・文芸資料研究所蔵『土佐絵源氏物語』等、枚挙に暇が無い。すると『歌絵』は、ここでは源氏絵詞のような、一卷毎に一場面絵を選びそれに詞書きを添えた絵画資料を参照していた可能性も考えられるようである。

絵の選択を優先させたかと思られる点では〈夏〉常夏卷も同様である。『歌絵』の詞と絵は、実はこの常夏卷のみ場面が一致しない。絵は物語巻頭の、釣殿で涼む公達らを描いた有名な場面絵だが、詞は巻頭和歌ともなった「なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人や尋ねむ」で、これは玉鬘の部屋を訪れた源氏が、彼女の両親（内大臣と故夕顔）を思い出して詠みかけた歌だからである。釣殿で涼む場面絵が有名なものだけにこの場面は捨てがたく、詞と絵とが乖離してしまうのを厭わず持つてきたものと思われる。

このようにみると、『源氏物語歌絵』には、源氏物語歌集・源氏梗概書・源氏絵詞等さまざまな資料が影をおとしていることに気がつく。では『歌絵』はそうした要素を併せ持った一本を参照していたのか、それとも実際に複

【表10】

部立	巻名	文字数	漢字数	漢字使用率%	備考（場面）
春	花 宴	65	15	23. 07	源氏と朧月夜の逢瀬
夏	常 夏	99	19	19. 38	釣殿での納涼
秋	少 女	78	20	25. 64	秋好中宮、紫の上に紅葉と和歌を贈る
冬	朝 顔	91	14	15. 38	月明かりのもと、女童たちの雪まろばし
賀	若菜下	151	49	32. 45	朱雀院五十賀のための女楽
祝	藤裏葉	197	62	31. 47	内大臣邸での藤宴

数の資料を博搜していたのか。この問題を考える手立てとして、部立て毎の漢字表記法に着目してみよう。

【表10】は『歌絵』各部立ての漢字使用率をまとめたものである。これによれば部立てによってかなりの差が見られる。例えば、場面絵優先かとみられた常夏巻や朝顔巻の漢字使用率が19・35％・15・38％と低くなっているのに対して、「是を女かくと申也」といった文言から、梗概書からの引用かとみられた若菜巻の場合は、その倍近い32・45％もの数値となっているからである。漢字使用率がここまで違うのは、やはりもとなつた資料の性質が異なっていたからではあるまいか。

先に紹介した居初津奈『女文章都織』によれば、津奈は源氏物語についても、石山寺伝説・雲隠六帖・並びなどに言及している。<sup>（註6）</sup>それなりの見識もあつたようだから、源氏物語の諸資料を参照することも可能だったのだろう。すると同じく〈歌絵〉とはいいいながら、『源氏物語歌絵』は、底本を忠実に引用した『伊勢物語の歌絵』とは異なつて、種々の資料を駆使して場面絵と歌とを選択し、かつこれらを歌集形式に編集し直した可能性をもつ作品だったことになる。

以上をまとめると次のようになる。

一、本学所蔵『伊勢物語の歌絵』と九州大学附属図書館蔵『源氏物語歌絵』は共に居初津奈の書画と思われること。  
二、この両書は、書誌の面から見ても共通項が多く、同一本屋の商品だったと思われること。

三、両書とも「歌」と「絵」によって伊勢なり源氏なりの作品世界を享受せしめんとしたもので、作品のねらいは共通していること。

四、以上三点から、この両書は津奈の〈歌絵シリーズ〉として制作された商品だったろうこと。

五、但し『伊勢』が物語本文から直接引用したのに対して、『源氏』の方は諸資料から選択し、かつそれらを歌集形式に編集し直している可能性があること。

注(1) 小泉吉永「居初津奈の女用文章」(一九九七年九月刊「江戸期おんな考」第八号)。同『日本書誌学大系八〇 女筆

手本解題』(一九九九年 青裳堂書店刊)。

(2) 石川透『奈良絵本・絵巻の展開』(二〇〇九年 三弥井書店刊)

(3) 引用は『稀観往来物集成』第18巻(一九九七年 大空社)所収本によった。但し私に句読点・濁点を施し、改行は任意である。

(4) 水谷不倒『草双紙と読本の研究』(一九七三年 中央公論社『水谷不倒著作集』第二巻所収)

(5) 柏崎順子「江戸版考 其三」(二〇一〇年三月 一橋大学「人文・自然研究」四号所収)

(6) 内容から見て『湖月抄』か。津奈の最初の著作である『女今川』が貞享四年(二六八七)、『湖月抄』の刊行はその十四年前になる。

本稿をなすに際し、九州大学附属図書館より多大な御高配を賜りました。紙面を借りて篤く御礼申し上げます。